

平家物語序説

——文芸論における封建的傾向について——

井 手 恒 雄

本稿は、平家物語の文芸学的研究の「序説」として、その文芸としての本質——いわゆる本意——が明かにされるためには、どのような考え方が排除されねばならぬかについて、私見をのべたものである。

どのような考え方が排除されねばならぬか、というような問題にかかわらずらないで、直ちに平家物語の本意が何であるかを語るべきであると、言われるかもしれない。で、最初にこの「序説」の趣旨をのべたい。

一体平家物語は、わが国の封建制度が始めて確立した時期の産物である。ということは、それが先ず以て封建社会における文化的産物として正しく理解されねばならないことを意味する。ところで封建的なもの、乃至それに対抗するものとしてのヒューマニスティックなるものの理解は、封建的なものから解放された、従つて真にヒューマニスティックな頭脳を以てして、始めて

可能である。われ／＼日本人は今漸く封建的な環境から逃れ出たばかりであるが、その身心に過去の臭氣が残っていないとは言えない。今日ほど、古典文芸研究者としてのわれ／＼の「自己」が問題になる時は、無いのではあるまいか。文芸研究なるものが、客体としての作品だけでなく、実に主体としての「自己」にかかわるものであることを、痛感させられる。私は、平家物語の本質如何というようなことも、日本の社会が進歩するにしたがつて、自然に明らかになる事がらの一つであると思う。文芸としての平家物語の理解を妨げているものが何であるかについて論ずるのも、あながち無駄ではあるまいと思うのである。

私の見るところ、日本文芸論史上、封建的・中世的なるものと近代的なるものとの闘争は、すでに元祿前後からその萌芽を見せている。人でいえば契沖や宜長である。封建的なものから最後に解放されるためには、歴史をかえりみてそれらの人に学ばねばならぬことが少くないと思う。私は意識的に平家物語論の範囲を逸脱して、というよりむしろその範囲に入る為の準備として

―その意味で本稿は、平家物語研究の「序説」として、いわば平家物語論以前のものである―平家物語以外の世界に平家物語研究への方法論的示唆を求めてみたいと思うのである。

本稿は、現代一流の学者の見解に対して敢えて妄評を試みた部分が少くない。あらかじめ非礼をお詫びして、御寛容を乞う次第である。

二

文芸に関する議論は、具体的になければならぬと思うので、作品の実際について論ずることにする。

巻第十に、平重衡に関する記事が見える。重衡は一の谷の合戦で生捕りにされたのであるが、都大路を引き廻された上で関東へ護送される。その間に、愛人のいわゆる内裏女房とはかない逢瀬を楽しんだり、法然上人に逢うて説法を聴聞したりする場面がある。又西国の一門に申し送つて、わが身を三種の神器と引きかえに助かるうとして、宗盛等から手ひどくはねつけられるという出来事もある。

ところで、亡くなられた内海弘蔵氏が、次のような批評の語を遺していられる。故人の語を悪く引用することは甚だ心苦しいが、曰く、「前には女房に向つて、今度生捕にされて来たのも、やはり君に逢ふべき因縁だつたといひ、ここでは又法然上人に向つて、『今度西国にていかにもなるべかりし身の、生きながら捕れてまかり上り候ふは、復び上人の御見参に入るべきにて候ひけり』といふ。当意即妙といへばいへるかも知れぬが、いかにして

も重衡の態度はあまりにめづしい。既に無理と知りつゝも、三種の神器にかへての命乞をなし、今またここで出家したいといふ。いかにもいくぢのない往生ぎはである。作者の筆の過ぎたのか、それともこれが重衡の実情であつたのか。」（『平家物語評釈』五七八頁）と。

この批評は、當つていないと思う。何故かというに、原作者の言おうとするところは、次に記すように、これの逆であると思われるからである。

平家物語の作者の、重衡に対する態度が、著しく同情的であることは、全く注意に値すると思う。作者は内海氏と違つて、めづしいとか意気地がないとか決して言つていない。重衡が捕れの身で入京したのは、寿永三年二月二十四日のことであつた。六条を東へ渡されたが、彼の乗る小入葉の車は、前後の簾を上げ、左右の物見が開かれていた。土肥次郎実平が三十余騎を率いて警固した。けだし重衡としては、誠に恥すべき有様であつた。しかも作者はこれに対して非難の声を放つことなく、反つて都人たちがこれを「あない」とほし云々と見た様子を写して、一段の哀れを添えた。

いわゆる内裏女房との再会のこととは、それこそめづしきことであるが、それが平家物語の最も感激的な場面を形づくつてゐる事は、注意すべきである。

一見めづしい出来事が、綿々として語りつゞけられる、文芸とは元来そういうものであるかと考えさせられる所である。重衡が女房を一目見る機会を得たのは、土肥次郎の特別の計らいによ

る。実平が「情ある士」と言われることは注意すべきである。女房が車に乗つて到着すると、重衡は出迎えて、車を簾を打ちかつぎ、手に手を取り組み、顔に顔を押し当てて、暫くは物も言わず、たゞ泣くばかりであつた。重衡はここで、自分が生捕られて再び都へ上つたのも、貴女に会うべき因縁であつたと云つたのである。作者はこゝで重衡を非難するどころか、「互ひの心の中推量られてあはれなり。」と言つた。

重衡は又法然上人と逢うて、今度生きながら捕えられて京都へ歸つたのは、上人に御目にかゝる因縁であつたと言つたが、これは当時として臆病とか卑劣とかいう筋の事からではない。彼は上人によつて仏道への第一歩を踏み出した。仏道は当時の人にとつては最高のもので、それに赴く機縁が何であるかは、敢えて問わなかつた筈である。

「海道下り」「千手前」が平家物語中の圧巻であることは、ここに登場する人々の人からの優しさ、つまり重衡に対する同情的態度に由来すると考えられる。先ず、池田の宿の長者の娘がある。彼女は重衡にいたく同情して、旅の空殖生の小屋のいぶせさにふるさといかに恋しかるらん、と詠じた。次に狩野宗茂がある。宗茂は「情ある者」であつて、重衡を厚くもてなし、湯殿を用意したりした。雨の降る日酒をすゝめ、重衡と千手との間をとりもつたのも彼であつた。源頼朝は、さすがに源氏の棟梁たるにふさわしい雅量を示して、重衡を優遇した。

平家物語巻第十の前半を埋める重衡の物語は、巻第十一の「重衡被斬」につづく。こゝで重衡は鎌倉から奈良へ転送されて斬ら

れることになる。「重衡被斬」の半分以上が、重衡とその北の方との最後の対面の記事であることは何を意味するか。それは作者の重衡に対する深い同情を意味するものでなければならぬ。重衡がその妻を恋うる有様は未練といへば未練であるが、それが又人情の真実というものである。人情の真実を語ることが避けては、文芸は成立しない。作者が苦心して表現しようとしたところのものは、そのような人情の真実であつたと思われる。

作者は、重衡が関東へ護送されるくだりで、「西国より生捕にせられ、都へ歸るだに口惜しきに、今又関の東へ赴かれけん心中、推量られてあはれなり」と言つた。この「あはれなり」はこれだけに限らない。内海氏の「めゝし」に対して、原作者の態度は「あはれなり」で一貫していると言つてよいと思う。重衡の態度は一見めゝしい。しかし作者がこれをめゝしいと言わず、「あはれなり」で通したという事実は、それをめゝしいと見る人の態度が、どこか誤つたものであることを教えるのに十分である。さてそれが誤りであるとするならば、それはどのようにして生まれた誤りであろうか。

内海氏の批評が、重衡関係の記事に関するかぎり見当外れであることは、確かにそうであるとしても、同氏の平家物語に対する態度のすべて、言いかえると同氏の立場そのものが、誤りであることを証拠立てることは容易でない。そしてその困難は、本稿のこれ迄の考察が、重衡関係の記事の範囲にかぎられているということによつて、一層その度を増す。思うにこれは、本稿が平家物語研究の「序説」であるかぎり、最終的に解決しがたい課題であ

る。武將たるものが生捕りにされて大略を渡され、愛人を慕うて恋々とし、妻に執着して我を忘れることが、何故にめくしくないかと反問されると、簡単には答えかねる事からである。完全な論議は本論にゆずり、ここでは平家物語の他の部分に、文字通りの一瞥を試みて置きたい。

重衡と似た立場にある人に平維盛がある。維盛が都落ちの際、北の方や若君・姫君と別れを惜しむ有様は、あまりにも未練であつた。彼がわが子から鎧の袖・草摺にとりすがられて立ちかねるのを見て、彼の弟資盛等は「行幸は遙かに延びさせ給ひぬらん、いかにや今迄」とたしなめた。平家の人達といえども、何がめくしいかはわきまえていたのではないか、と言われれば確かにそうである。重衡と並べられる他の一人は、平宗盛である。宗盛は「八島院宣」では強いことを言っているが、元来この上もない臆病者である。彼が敵の大將頼朝の前に引出され且つ又転送されて斬られるあたりは、平氏一門の長者たるにはふさわしくないものがあつた。作者は、彼が頼朝の使者を迎えて居ずまいを正したありさまを、「居なほり畏り給ひけるこそうたてけれ。」と語り、次いで彼が斬られてその首を渡され、獄門の左の櫓の木に懸けられた次第を記して、「生きての恥死んでの恥何れも劣らざりけり。」と言つた。彼が作者自身によつて恥ずべき人物とされたところを見ると、この物語には武士の武士たる所以の勇らしさを求める氣持が強いのではないか、と言うならばそれも又確かにそうである。

平家の一門の中で最も賞讃される人物の一人は、忠度である。

彼は敵味方に知られた歌人であるが、又勇猛な武將であつた。彼は一の谷の合戦で決闘には勝ちながら、相手の童僕に不意を打たれた。彼は片腕をぶつとりと斬り落されながら重傷にひるまず、敵を「弓長ばかり」はねとばし、その後西に向かつて高声に十念をとなえた。その氣力は人を圧倒し去るものがあつた。平家物語をして平家物語たらしめる所以の精神は、意志的で質実剛健で男性的な武士的精神ではないかと言われれば、俄かに反対しがたいところである。こゝでわれ／＼が考えねばならぬことは、文芸というものが独自の立場に立つものであるということである。この場合武士は武士らしくなければならぬとか、生捕りにされ大略を渡され、衆人の前で斬られ獄門にかけられることは、全く恥ずべきことであるということは、間違いない事実である。しかも文芸の本意とするところのものはそれは別であるということである。

端的に言つて、右の道理は容易に人に通じない。普通の人の考えの逆をゆくものであるからである。私の見るところ、この道理を始めて主張したのは、契沖に啓発された若き本居宣長である。彼は人も知る通り、源氏物語の本意とするところは「もののおはれ」であるとし、「そのしわざの善悪はうちすててかはらず、ただとるところは物のおはれなり」（『紫文要領』）などと言つたので、世人からは多くの場合誤解されがちであつたようである。善悪をうちすてるといふようなことが、全くもつて怪しからぬ道德無視と考えられたのである。彼が「かやうにいはいはばたゞ善悪にかゝはらず、人情にしたがふをよしとして、人にもさやうにおしゆるかと思ふ人あるべけれど、さにはあらず云々」

(同右)と、その論をすゝめるあたりは、悲壮でさえある。私は、宣長にならつてであるが、平家物語の本意とするところは、結局、恩愛の「あはれ」とでも云うべきものではないかと思う。平家物語の本意は武士的精神というようなものではないかというに、そうではないと思う。武士がめゝしくあつてもよいのかというにそうではない。たゞ、文芸としては恩愛の「あはれ」を旨として、めゝしいとかめゝしくないとかは「うちすててかかはらないのだと思う。

宣長が平家物語について、殆ど全く何事も言い残さなかつたことは、わが文芸学史上の不幸であると思う。われ／＼はこの作品に関しては『紫文要領』以前にある。この意味で平家物語の文芸としての本質を論ずるに当つて、一度宣長にかえり、「もののあはれ」の問題を検討することは、少くとも「序説」的立場においては、唐突ではないと思う。

以下、平家物語から一応離れることを恐れないで、方法論的な問題のあれこれを取扱つてみたい。

三

和辻博士は「もののあはれ」を論じて、次のように言われる。

曰く、「平安朝は何人も知る如く、意力の不足の著しい時代である。その原因は恐らく数世紀に亘る平和な貴族生活の眼界の狭少、精神的弛緩、享樂の過度、よき刺戟の欠亡等に存するであらう。当時の文学美術等によつてみれば、意力の緊張、剛強、壮烈等を讚美するこゝろや、意力の弱さに起因する一切の醜さを正当に

評価する力は、全然欠けてゐる。むしろ意志の強きことが彼等には醜惡に感ぜられたらしい。それほど人々は意志が弱く、しかもその弱さを自覺してゐなかつたのである。(中略)かく徹底の傾向を欠いた、衝動追迫の力なき、しかも感受性に於ては鋭敏な、思慕の情の強い詠歎の心、それこそ『物のあはれ』なる言葉に最もふさわしい心である。我々はこの言葉に、実行力の欠乏、停滞せる者の詠歎、といふ如き倍音の伴ふことを、正当な理由によつて肯くことが出来る。」(『日本精神史研究』二二九—三〇頁)と。

先ず、「当時の文学美術によつて」平安朝を見る、ということについて考えてみよう。一体文芸作品というものは、どの程度にその当時の社会をあらわすものであろうか。私は、和辻博士がこゝに「平安朝は何人も知る通り意力の不足の著しい時代である云々」と言われるが、それがたゞ源氏物語—及びそれに近い和歌や物語のたぐい—によつてのことであれば、再考の余地があると思う。たしかに源氏物語は、その内容として、その当時の社会の文化現象のすべてを、網羅する底の大作である。しかも本来文芸作品である以上、限度がある。たとえば今日われ／＼が英国の現代文芸の傑作と称されるものを讀むとする。それは恋愛と性慾との事に関して、前人未踏の境地を開拓した名作であるとする。名作であるが故に問題の多い作品であるとする。われ／＼はこれを讀んで、現代の英国の社会はかくの如く頹廢したものであるかと考えたとする。それは誤解である。

次に、源氏物語に出て来る人たち—それは右に述べたような意味で、決して現実の平安朝人ではなかつたにしても—が、

「意力の緊張、剛強、壮烈等を讚美することゝ、意力の弱さに起因する一切の醜さを正当に評価する力」を全然欠き、或はむしろ「意志の強きこと」を「醜惡」と感じていたらしい、というのが何を意味するかを考えてみたい。

作品の実際について見ることにする。

物語の最初に出て来る人物は、いわゆる桐壺の帝であるが、これこそ「意力の不足の著しい」人物であつた。その更衣を寵愛する有様は「人のそしりをもえ憚らせ給はず、世のためしにもなりぬべき」ものであつた。最初から「もろこしにもかゝる事の起りにこそ世も乱れ悪しかりけれど、やう／＼天の下にもあぢきなう、人のもてなやみぐさになりて云々」とある。もし「桐壺」の巻の出来事が現実社会のものであつたならば、それこそめ／＼しいかぎりであつた。否め／＼しいだけではない、それは国家的災厄を將來すべきものとして、確かに非難に値した。實際帝は、意志の強さを欠くというだけではなく、それに起因する不祥事を予想することも出来ぬ、あわれな存在であつた。

ところで問題は作者の態度である。作者は一応は帝の有様を無分別なるものとしている。たとえば、近侍の人の語として、「今はたかく世の中のことをも、思し捨てたるやうになり行くは、いと怠々しきわざなり。」というのがそれである。しかも一概にめ／＼しとしているのではないことは、注意しなければならぬ。例の命婦が亡き更衣の里を訪れて、帝に復命する場面がある。こゝで作者は「命婦は、まだ大殿籠らせ給はざりけるを、あはれに見奉る。」と書いた。これなどが作者の態度の根本を最もよく示すもので

はあるまいか。作者の態度は同情的である。つまり、め／＼ではなく、「あはれ」で一貫しているのである。

われ／＼が考えなければならぬことは、桐壺の帝を以て、め／＼とか男らしくないとかいうのなら、もはや源氏物語の源氏物語たる所以は見失われる——或は始めから目に映らない——ということである。作者がもし、帝を以てそのような存在と考え、これを輕蔑するような人であつたならば、第一この物語を書きはしなかつたであらう。それを「あはれ」と見、自らその悲劇に涙する人であつたればこそ、才筆をふるつて、更衣退出の悲しい場面を描き、その死と葬送の堪えがたい場面を描き、命婦と母北の方の会見の哀切な場面を描いたのである。そしてあの大作のすべてを物したのである。従つてその本意は、別にあると見なければならぬ。

物語は、主人公が若き継母藤壺に恋慕することによつて、漸く進展する。一体主人公の光源氏という人が、意志の力の最も乏しいと言へば言える人である。藤壺に対する憧憬的恋慕は「をさなき程の御ひとへ心にかゝりて、いと苦しままでぞ思しける。」（桐壺）とある。文字通り制せんとして制し得ぬ愛慾の物語の、主人公たるにふさわしい人であつた。彼は果して「意力の弱さに起因する一切の醜さを正当に評価する力」を欠く人であつたろうか。それに対する答えは「然り」である。「全然」欠くとは言いきれぬものがあるようでもある。自ら反省して苦しむ場面も少ないからである。しかし全体的に見て、結果的に見て、弱い人であることに相違ない。主人公と藤壺との情事は、意力の弱さに起

因する醜い出来事、と言えは言えるものである。古来、源氏物語に關する毀譽褒貶の論議は、実にこの一点―及びこれと因果關係にある女三の宮對柏木の事件―をめぐつて行われたかの觀がある。それは確かに邪惡である。今日もし、これをしも正当とするならば、それこそ現代人としても物事を「正當に評價する力」を欠く者と言われても仕方がないであらう。しかも問題は、そういう情事が敢えて物語られ書きつゞられたということである。

柏木、夕霧、乃至薫は、主人公に次ぐ重要な存在である。そして彼等はその物語における地位が重要であるのに正比例して、意志薄弱であつたかの感がある。これ等の人々について考へてみても、彼等が實にめづかしいことは事實であるが、作者は何故力をつくしてそういう人々のことを物語つたかという、同じ問題が残る。

和辻博士の「むしろ意志の強きことが彼等には醜惡に感ぜられたらしい云々」は、どうであらうか。それに対しては次のようなことが言えると思う。博士の言は全面的に否定は出来ないが、こういうことも言えると思う。つまり意志が強いということも事によりけりであるということである。

例えば弘徽殿女御という人物について見てみよう。彼女は桐壺の帝の悲歎をよそに、「久しう上の御局にもまう上り給はず、月の面白きに、夜更くるまで遊びをぞし給ふなる」という。これがいかに心なき仕業であるかは、宣長の言をまつまでもないことである。作者はこゝで「この頃の御氣色を見奉る上人女房などは、かたはら痛しと聞きけり」という。實際彼女は珍らしく強氣な人

である。しかもその強氣は、決して賞讃されなかつた。

又物語に出て来る或種の僧侶について見てみよう。たとえば「夕霧」の巻の律師はどうであらうか。御息所に、夕霧が落葉の宮の許に通う旨を告げたのはこの人である。彼は「いと聖だちすく／＼しき律師」で、ゆくりもなく、「そよやこの大將は、いつよりこゝには参り通ひ給ふぞ」と問いかけた。そして御息所の辯解を物ともせず、「いであなかたは。なにがしに隠さるべきことにあらず云々」とばかりに語り始めたのである。そのありさまは「頭ふりてたゞ言ひに言ひ放」つたとある。これを作者が、「醜惡」という言葉は当らないにせよ、それに近い感情を以て記したことはたしかである。しかしそれをそう見たのは別に考へがあつてのことである。又例えば、「椎本」の巻の阿闍梨は、それに劣らぬ人であつた。八の宮が世を去るときのこと、二人の姫が亡き父を慕うて、せめて死顔にでも対面したいと願うのをむげに斥けて、「日ごろも、また逢ひ見給ふまじきことを聞え知らせつれば、今はまして、かたみに御心とどめ給ふまじき御心遣ひを、習ひ給ふべきなり。」と言つた。姫達は、彼のあまりに「さかしき聖心」を「憎く辛し」と思つたという。凡そ僧なるものは、物語の中で最も意志の強い人達である。源氏物語の作者によれば醜惡又はそれに近い人である。作者が彼等をそう見るのは、特別の意図―それが文芸の立場である―があつてのことである。

以上要するに、和辻博士の説は、―丁度内海氏の平家物語に對する批評がそうであつたように―そう言えは言える、しかしそれでは作者の本意とするところは別のものになつてしまふ、

と言うべきものであると思う。

さて「もののあはれ」とは何か。

私が見るところ、それは、桐壺帝や光源氏や柏木や夕霧や薫を、一概にめづしいとはしない、人間として誠に寛大な態度であつて、今日の語でヒューマニズムとでも言うべきものであると思う。それは人間的と言えこれほど人間的なものはない、甚だ徹底したものであると思う。それは普通には、和辻博士が「衝動追迫の力なき、しかも感受性に於ては鋭敏な、思慕の情の強い詠歎の心」など言われるように、女性的なるもの、ときには病的なものとさえ、考えられがちであるが、そうではないと思う。それは、これ迄の日本人が男女の正当なる交際をも認めず、恋愛に対しては絶対否定の態度を堅持しつゞけて来た、その封建的傾向に対する古来の唯一の抵抗を意味するものであり、今日において最も尊重さるべきものであると思う。

恋愛絶対否定の態度が封建的であるというが、光源氏や柏木や夕霧の恋は不倫の恋である、今日こういう恋愛をも肯定して差支えないのか、と反問されるかもしれない。それは平家物語の場合、武士たるものが生捕りにされ大略を渡されてもよいのか、というのと同じ立場に立つものであり、同様に解答困難なものである。

われ／＼は今日こういう疑問が提出されるにつけて、宜長の言葉を思うべきであると思う。それは今日においても理解困難なものであるが。私が言いたいのは、それは問題として一応検討ずみのものであるということである。宜長は或人の問として、成程恋

愛は人情の常として肯定しなければならぬ、しかしそれは尋常の恋の場合である、「父母の許さぬ処女に心をかけ、ひそかにこれをあざむき出し、あるは人の室女に私通しなどする」ことは、決して許されぬことではないか、と言つた上で、その解答として、苦心のあとの著しい意見をのべ、最後を「たゞ歌は、さやうの議論には一向かゝはらぬことにて、歌のすぐれたるを賞しよみすることなり。」と結んでゐる。（以上『あしわけをぶね』）

源氏物語は、一言にして言えば、悲しく苦しい恋に悩む人の物語である。恋に悩むのがめづしいとか意志薄弱であるとか言つてゐる間は、その本質はわからないのがあたりまえではあるまいか。

四

岡崎教授は「もののあはれ」に関して、次のような述懐をされたことがある。曰く、「源氏物語を女性的美の代表的なものとして見る事は、宜長によつて定説となつたと言つてもよく、これは真にその通りで、敢て異を立てるつもりではないが、しかしそれで一切解決されたものとしてしまふのに対しては、聊か不満の情を持たざるを得ない。学生が演習の時間に言ふ所を聞いてゐると、最早源氏物語は『物のあはれ』であることにきまつてゐて、何をどう言ひかへても結局その外に出ないのである。源氏物語の文学的研究はかくて最早終りを告げ、我々は何等為すべき事を持たぬかの如くである。演習の際私は、仏教思想に基く宿世の觀念が重大な人生觀の基礎をなしてゐることを告げた。するとこれも

結局『物のあはれ』を催す種にすぎないことになつてしまつたのである。併し私の感情は収まらなかつた。宿世の悩みから「あはれ」の嘆声の立昇る事は事実であるが、その宿世を積極的に涅槃に向つて解消する意志行動は全く無いのであるか、其の方向にどの程度迄考察を進め得るかといふ事を、本篇^(註)において試みたのである。私のかゝる試図は不思議に学生の間に評判がわるいのである。それは学生が日本的「物のあはれ」を理解し得る為であるとか、又は宣長を崇拜する為であるとかいふよりも、西洋の人道主義の影響をうけて、東洋的・中世的精神に対する理解を失つてゐる為ではないかと、私は思ふのである。」(下略) (『日本文藝学』跋文)と。

註 本篇とは論文「光源氏の道心」を指す。

私は今日まで、岡崎教授の学説に負う所が多い。平家物語の「文芸学的研究」という言い方からして、実はその影響を受けてのことである。しかもこゝでは敢えて妄評を試みようと思う。

教授は、源氏物語を「もののあはれ」で片付けようとする傾向が、「西洋の人道主義の影響をうけて、東洋的・中世的精神に対する理解を失つてゐる為」ではないかと言われる。現在の教授はこれを書かれた当時と心境を異にしていることかと思うが、西洋の人道主義の影響を受けることを、蔑視されるのは穩当でないと思う。ヒューマニズムなくして、何の芸術であろうか。も一つ、私は平家物語を中心とするいわゆる中世文芸を平素の研究対象とするものであるが、中世的精神なるものが、人が西洋の人道主義の影響を受けるとその為その理解を失うようなものであると

いうことに対しては、曾て疑問を感じたことがあり今も不審に念うところである。わが国においては最近まで、いわゆる中世的精神は元来反人道主義的なものとして理解されて来たのであろうか。そういえば「中世的精神」なる語は、曖昧なものである。一体それは、われ／＼が今日も人に誇るべき卓越した精神なのであろうか。それとも現在われ／＼が、それから解放されることを必要とするところの、悪しき精神の謂なのであろうか。

宣長の「もののあはれ」が「女性的美」というようなものでないことについては、すでにのべた。「光源氏の道心」の試図は、当時の学生間に評判がよくなかつたと、教授自ら言われるようであるが、それはその試図が所詮ヒューマニズムを無視するものであつたからであると思う。私は、今日平家物語の本意が明かにされるために、最も必要なことは何であるかというに、それはこれまでのいわゆる国文学界に支配的であつたヒューマニズム否定の風潮が払拭されることであると思う。

教授の「光源氏の道心」を正當に批判することは容易ではない。私の見るところ、大きな難問題が横たわつてゐる。それは何かというに仏教がそれである。私は平家物語研究の準備的作業として、日本文芸と仏教との交渉の問題について調べてみたことがある。私は、日本文芸史上の重要な作品について吟味した結果、日本の文芸に関する限り仏教なるものが、予期に反して多分に反ヒューマニスティックなものであることに驚いた。これは、私自身最初は意外の感に打たれたのであるから、人の賛成を得ることは困難であつた。いわゆる道心なるものが、いかに人間に対して

重臣を与えるものであるか、それ故にいかに深い歎きを生みいか
に哀切な文芸を生むかは、真に予想以上であつた。しかしそれも
人に知らせ納得を得ることは困難であつた。

私は、日本文芸と仏教との交渉の問題について、思索をすゝめ
ればすゝめる程、宣長の偉大さがわかつて来た。宣長の反仏教的
立場は、今日よくその意味が考えられなければならないと思う。
宣長は「仏道はたゞ悟りと迷ひとをわきまへて、その悟りを得る
のみにして、その余のことは皆枝葉のみなり。かくてその悟りと
いふもの、また無用の空論にして、露も世に益ある事なし、然る
を世の人、その枝葉の方便にまどへるは、いかなる愚かなる心ぞ
や」(『玉かつま』)とか、「ほとけの道にはさばかりさかしだちた
る、今の世の人の心も、うつりやすきは、かならず其の道よろし
と思ひとれるにしもあらねど、むかしよりあまねくさかりにて、
おしなべての世の中の人の、皆おこなふわざなるに、かたへはも
よほさるゝぞ多かりける。すべてなにわぎも、世にあまねく、
人のみなする事には、たれもすゝろに心のよりやすきならひぞか
し」(『全右』)とか言う人であつた。その宣長が、源氏物語は仏教
では律し得られぬ人情の真実を描くものであると主張したのが、
いわゆる「もののあはれ」論であると、私は思うのである。

岡崎教授の「光源氏の道心」を批評することは、仏教の本質を
明かにしたあとでなければ不可能であると思われるが、それはこ
こでは到底のぞめないことである。ここで言えることは、次のよ
うなことであると思う。それは教授の言われることが、例えば
「若菜上」の巻以下の朱雀院の場合に適応され得るかどうかであ

る。道心というもののそれほど尊いことが、ここでも言えるかと
いうことである。

私ははじめて源氏物語をよんだとき、朱雀院がどうしても女三
の宮をうちすてて出家しなければならぬということ、わから
なかつた。出家なるものが当時理想視されたことは、朱雀院の出
家の直後における、源氏の君の語によつても明らかであつた。曰
く、「故院に後れ牽りし頃ほひより、世の常なく思ひ給へられし
かば、この方の本意深く進み侍りにしを、心弱く思ふ給へたゆた
ふ事のみ侍りつゝ、つひにかく見牽りなし侍るまで、おくれ牽り
ぬる心のぬるさは、恥づかしう思ふ給へらるゝかな」と。みごとに
出家をとげた院の姿を見ると、自分が恥かしいというのであるか
ら、これらの人達にとつて出家という行為がその理想であつたこ
とがわかるというものである。然し朱雀院の場合は、少くとも今
日の常識では不審なことが多い。昔の人の考えを、今日の感覚で
批判してもはじまらないという人もあろうが、それは当たらないと
思う。われ／＼は今日の読者として、朱雀院の切々の情がいかに
して喚起されたものであるかを、十分に掘りさげて考えてみる必
要があると思う。実際、源氏物語の人々が理想とするところは、
われ／＼にはあまりにも不自然としか思われないものがある。光
源氏の場合、彼は愛慾の煩惱を離脱して聖なる境地に達しようと
したと言えよう。何故朱雀院があゝまでして最愛のわが子をふり
捨てねばならなかつたかがわからない。一口に子の道の闇とか
「ほだし」とか言うが、当時の人の親たるものは、なぜわが子を
そのようなものと考えねばならなかつたのであろうか。

これに対する解答は、私の考えでは一つしかなかった。それは出家なるものが、当時において最も甚だしかったところの、不自然的「反人間的行為である」とすることであつた。一体出家によつて達せられる聖なる境地が、「理想」の世界であるというのにしては、朱雀院に関する物語は、あまりにも涙が多い。そこでは、愛着を断つことよりも、その断ちがたいことの方が、主眼になつてゐるようであつた。本文の表現に即して考えれば考えるほど、そのように感ぜられた。

「若菜上」の巻に、朱雀院から紫の上に、消息が届けられるところがある。その消息には、

「幼き人の、心なきさまにて、うつろひ物すらむを、罪なく
思し許して後見給へ。尋ね給ふべき故もあらむとぞ。」

そむきにしこの世に残る心こそ入る山道のほだしなりけれ
闇をえ晴けで聞ゆるも、をこがましや。」

とあつたという。ここでは、わが子への愛着が、いわゆる真実な在り方をめざして進もうとするわが身にとつて、束縛であつたといふのであるが、一体作者の表現しようとするところは、われ／＼はそれほどの苦悩を経て真実なる境地に達せねばならぬといふことであらうか、それとも逆に人間自然の「愛」というようなものを肯定するところに、もう一つの真実なる在り方があるといふことであらうか。

どうも後者であるようである。

日本人には、古来わが子を「ほだし」とみるような思想傾向がつよかつたと思う。後の人であるが、西行や荊菴道心が、決然と

してわが子を斥けたというようなことが、美談として語り伝えられた事実がそれを物語ると思う。然らば、文芸なるものは日本人にとつて何であつたかというに、「愛」の何であるを切実に悟らせるためのものであつたと思う。わが子を「ほだし」視する思想的偏向を排し、人をして真実の人間の愛情に目ざましめる働きをするものであつたと思う。人を「涅槃」の方向にむかわしめず、反つて「人間」の方向に導くものであつたと思う。

右の朱雀院の歌にこたえて、紫の上は

そむく世のうしろめたくばさがたき絆をしひてかけなはなれそ

と詠んだ。人間の真実をすなおに歌い上げた、いわば最もヒューマニスティックな作であると思う。

「柏木」の巻で、女三の宮御産のことが語られる。そこで朱雀院の道心が俄かに動揺した趣が見える。院は人伝てに宮の様子をきいて、「あるまじきこと」と思いながら、夜に隠れて六条院を訪れたのである。院は源氏の君に「世の中を顧みすまじう思ひ侍りしかど、なほさめ難きものは、この道の闇になむ侍りければ、行ひも懈怠して、もし後れ先だつ道理のまゝならで別れなば、やがてこの恨みもや形見に残らむとあぢきなさに、この世の譏りをば知らで、かく物し侍る」と言つたという。

私が言いたいのは、道心を以て最も尊しとする立場から見るとでは、このあたりのよさがわからないのではないかということである。当時の仏道の立場から見れば、院の態度は誠にめづらしく、文字通り「あるまじきこと」であり、夜に隠れて行動するにふさ

わしい。考えようによつては、作者は、人が聖なる境地に達せんがためには、この様な人間の苦悩を経なければならぬ、と言つてゐるようでもある。しかしそうではあるまい。私は、仏教とヒューマニズムの關聯如何という根本的な問題はさておき、少くともこのような場合は、宿世や涅槃を云々するよりも、仏道を離れて物の眞実を見よと説いた古人の教えに従う方がより適切であるように思ふのである。

以上要するに、今日平家物語の理解を妨げているところのものが、これまで支配的であつた封建的||ヒューマニズム否定的傾向であることを明かにしたつもりである。最初に断つたように、本稿では平家物語を取巻く一般の傾向を問題にした。源氏物語といふ「もののあはれ」といい、いづれも平家物語と直接の關係はない。しかもそういうものに関する論議を通じてうかがわれる、人々の文芸の理解の仕方は、同じ日本文芸史上の作品である平家物語の研究を強く制約する力を持つと思われる。私の見るところ、過去の日本における本格的な文芸研究は、源氏物語の如き作品を典型的な対象として進められ、且つ正しい文芸観もそれによつて育てられた。われ／＼は何を研究するにしてもこの伝統に従う必要があると思う。宣長は、当時の道学的立場からはきびしく非難されたところの愛慾の煩悩を「人間」の眞実として賞揚した。その点彼はまさしく封建制下におけるヒューマニズムの擁護者たることを失わなかつた。今日宣長の「もののあはれ」にはあきたりないという人の氣持の中には、そういう人達自身は宣長を超越し

たつもりであるにせよ、宣長以前の世界に逆行せんとするものがあると思う。そういう傾向は、今日平家物語を取巻く一般的傾向として、警戒を要すると思うのである。

和辻博士の論は、博士が平安朝乃至平安朝文芸を以て意力を欠くものであるとされるところを重視した。意力を欠くとか欠かぬいとかを以て価値評価の標準とする立場が、本来複雑な愛情のもつれに悩み且つ苦しむ「め／＼しい」人々の物語である源氏物語の本質を見誤らせるばかりでなく、他の分野におし及ぼされて、例えば平家物語の場合、「意力の緊張、剛強、壮烈等を讚美するところ」の讚美となつて、その哀れなる時代の哀れなる物語である所以を見失わせる結果に陥ることを恐れたのである。

岡崎教授の論は、「西洋の人道主義の影響を受けて云々」の語を中心に批判してみた。私の批判は中途半端であつたかと思う。私は平家物語を支えるものは無常觀||仏教思想であるといわれるような考えを排除して、然る上でその本質的なものを見出したいと考えている。仏教思想は武士的精神と相並んで最も意力的なものであつた。私は平家物語における仏教思想が、文芸の精神であるよりむしろ愛の「あはれ」を催す種であつたことを実証する用意をすゝめている。こゝでは源氏物語における「道心」は「もののあはれ」を催す種にすぎなかつたと考えては悪いかというやうな問題を、平家物語論以前の試金石的な問題として、取上げてみたのである。

(昭和二七、五、一五)